

通し番号	5075
------	------

分類番号	R03-24-12-03
------	--------------

水田利用作物マコモの栽培特性を明らかにしました	
[要約] 水田利用作物マコモの品種については、‘千葉早生’が収量性に優れており、標準肥料と緩効性肥料での栽培をそれぞれ組み合わせることで、1茎重60g以上の収穫数を平準化できる。	
神奈川県農業技術センター・生産技術部	連絡先 0463-58-0333

[背景・ねらい]

マコモは、「大磯マコモ」としてかながわブランドにも登録され注目されているが、県内での栽培事例が限られており、高品質・安定生産するためには栽培特性等を明らかにする必要がある。そこで、本県に適した品種や作期、施肥管理について検討し、収穫期間や収量等の特性を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 1 品種は、‘青殻’に比べて‘千葉早生’は収穫開始が約3週間早く、収穫個数が多いため、収量性に優れる(表1)。
- 2 ‘千葉早生’を供試し、標準肥料区と緩効性肥料区を比較したところ、収穫期間及び収穫個数は概ね同等であるが、1茎重及び収量は、標準肥料区がやや多い(表2)。
- 3 1茎重60g以上の収穫個数は、標準肥料区は収穫期前半に多く、緩効性肥料区では収穫期後半に多い傾向があるため、標準肥料栽培と緩効性肥料栽培を組み合わせることにより1茎重60g以上の収穫数を平準化できる(図1)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 マコモは抽水植物であるため、水稻と同様に収穫期まで水を確保する必要があり、湛水または走水を行う。
- 2 収穫の遅れは、可食部が硬くなったり、黒穂病菌の胞子が繁殖して黒くなり、品質が低下するので、適期(葉鞘の抱合部から白い可食部(マコモタケ)がわずかに見える頃)に収穫する。
- 3 花茎に黒穂病菌が寄生することで可食部(マコモタケ)になるため、黒穂病菌が寄生していない出穂株は、次年度の親株として使用しない(図2)。

[具体的データ]

表1 品種別の収量調査(2020年5月19日植え)

品種	収穫期間	個数 (個/a)	収量 (kg/a)	1茎重 (g/個)
千葉早生	10月12日～11月30日	2,500	189.9	75.2
青殻	11月2日～11月30日	667	46.2	90.3

注) 標準施肥(基肥N:P₂O₅:K₂O=9.0:13.5:13.5、追肥N:P₂O₅:K₂O=6.0:0.0:6.0kg/10a(9月2日))で行った。

表2 肥料別の収量調査(2021年5月10日植え、供試品種‘千葉早生’)

試験区	収穫期間	収穫個数 (個/a)	収量 (kg/a)	1茎重 (g/個)
標準肥料区	9月15日～10月19日	3,480	369.0	106.0
緩効性肥料区	9月17日～10月19日	3,790	292.0	77.0

注) 標準肥料区 (基肥N:P₂O₅:K₂O=9.0:13.5:13.5、追肥N:P₂O₅:K₂O=6.0:0.0:6.0kg/10a(8月30日))

緩効性肥料区 (基肥N:P₂O₅:K₂O=15.0:17.1:15.0kg/10a)

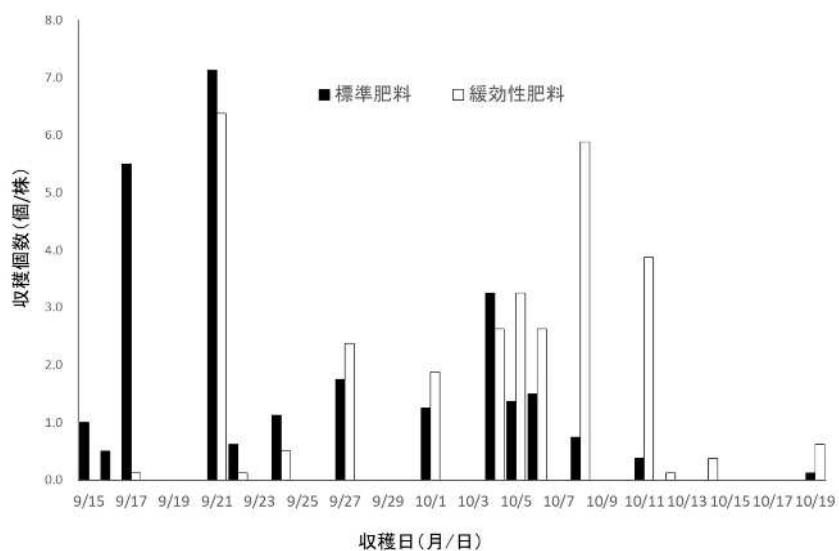


図1 1茎重60g以上の収穫個数(2021年5/10植え)



図2 マコモの生育及び外観
(左:生育期、中央:収穫期、右:可食部)

- [資料名] 令和3年度試験研究成績書(普通作)
- [研究課題名] 水田利用作物マコモの栽培特性の解明
- [研究期間] 2020(R2)～2021(R3)年度
- [研究者担当名] 岡野英明
- [協力・分担関係]